

障がい者スポーツ 主な国際競技大会

パラリンピック競技大会

国際パラリンピック委員会(IPC)が主催する、身体障害者を対象とした国際スポーツ競技大会の最高峰。オリンピックと同じ年に同じ場所で開催される。障害の度合いに応じた階級が存在する。聴覚障がい者、知的障がい者、精神障がい者は参加できない。
実施競技は夏季20種目、冬季5種目。

デフリンピック競技大会

国際ろう者スポーツ委員会(ICSD,CISS)が主催する、聴覚障がい者を対象としたスポーツの国際競技大会の最高峰で、1924年に始まった障がい者スポーツにおける最初の国際競技大会。
4年に1度開催され、次回大会は夏季が2013年、冬季大会が2015年の予定。
実施競技は夏季19種目、冬季5種目。

スペシャルオリンピックス

知的障がいがある人の自立や社会参加を目的に日常的なスポーツプログラムを提供したり、成果を発表する場を提供したりする非営利組織で、その活動と協議会を指す。世界大会は4年に1度開催される。
日本のスペシャルオリンピックスへの本格的な取り組みは、1993年に熊本から始まった。



「スポーツが好きな人なら、誰でもSOのコーチになることができます。ボランティアですから、できることを、できるときに、できる範囲で携わってもらえばいいんです。純粹に、アスリートと一緒にスポーツを楽しむことが、支援になるんですよ」

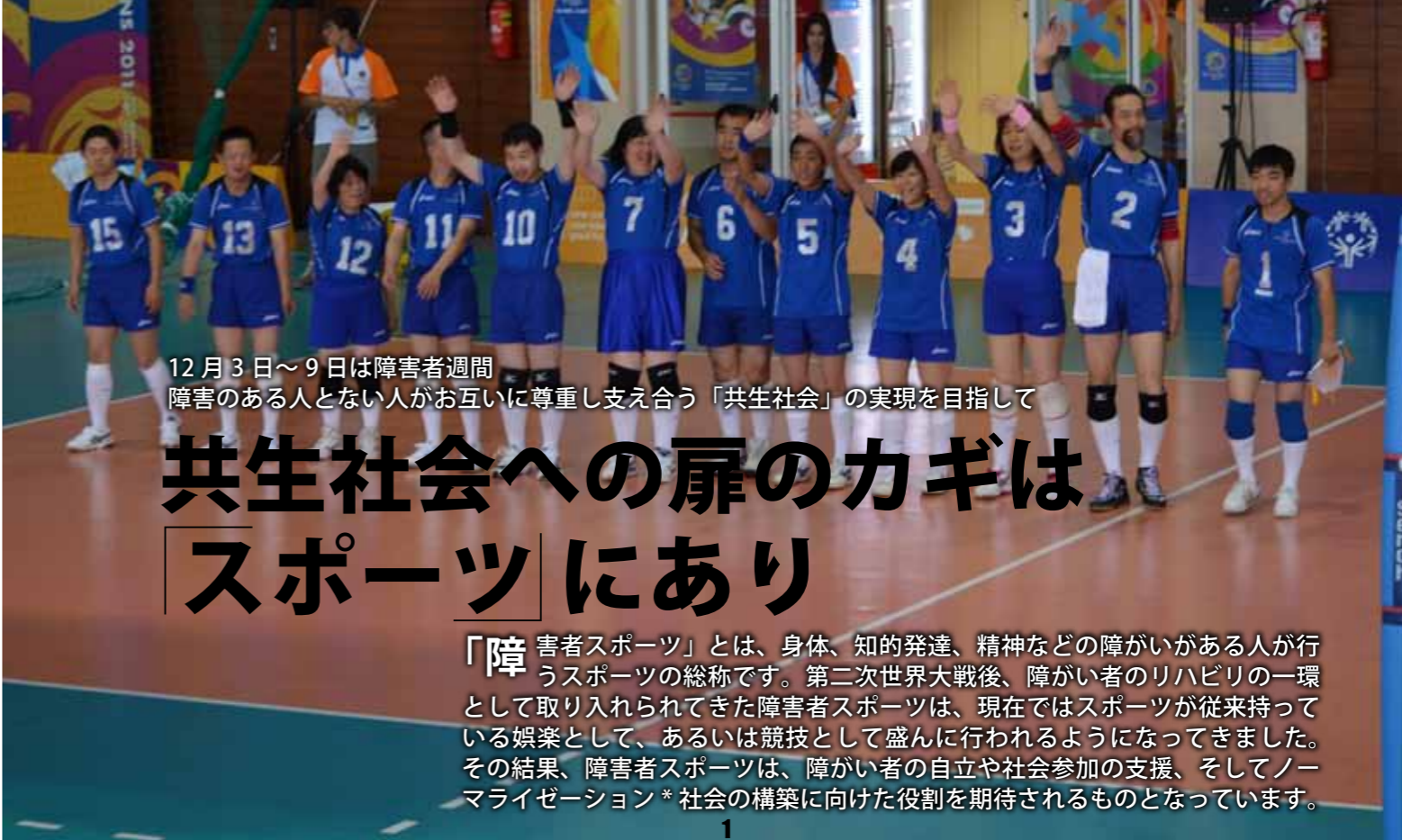
田島光枝さん

たじまみつえ●1944(昭和19)年生まれ、東宮内在住。体育・養護の教員として、市内学校を中心に特別支援教育に携わる。1992年に行われたスペシャルオリンピックス説明会に参加したことがきっかけで、1993年に熊本から始まったスペシャルオリンピックスに、現在まで指導者として携わる。

アスリートが意欲を持ってスポーツに取り組み、持っている能力を最大限に発揮することで認められるシステムが採用されています。その他にも、他の競技大会にない工夫が多くなされているのがSOの特徴です。アスリートの活動を支えているのは、ボランティアに従事するコーチと、アスリートの皆さんのファミリー(家族)です。荒尾ブランチにはおよそ40人のアスリート、そのファミリーとおよそ15人のコーチがいます。また、アスリートの活動のために低額または無償で施設を提供してくれる地域施設の協力は欠かせません。アスリートの日頃の取り組みと、地域やボランティアの協力で荒尾ブランチのアスリートは世界で素晴らしい成績を収めました。しかしコーチとしてスポーツの指導に携わる人材は、常に不足しています。「SOは、社会と関わりを持ち、自立を支援する目的があります。ですからアスリートが住んでいる地域の人と一緒に交流しながらスポーツを

することが大切なんです」と田島さんは話し、スポーツを通じた地域の人との交流が、相互理解を深め、障がい者の自立を促進するのだと話してくれました。 「障壁」のない社会へ
本年8月、障害者基本法が改正され、「障がい」とはその人にある「機能の障がい」と、「日常生活又は社会生活を営む上で障壁となるような社会における事物、制度、慣行、觀念その他一切のもの」である「社会的障壁」との相互作用であることが明記されました。障がいはその人が持つ「個性」です。その個性である障がいをもとで普通の生活を送ることが困難であるならば、障がいのもう一つの要素である「社会的障壁」を取り除くことが、障がいがある人とならない人の共生社会を開く一番の近道です。誰もが楽しむことができるスポーツを通じての交流や支援が、障がいの有無に関係なく尊重し支え合う社会を築くために重要なカギのひとつなのです。

1 SO 夏季大会アテネ大会バレーボール競技に出場したバレーボール日本代表の皆さん。爽やかな笑顔。 2 開会式も楽しみました。 3・4 世界の舞台、慣れない環境の中でも生き生きとプレーしました。 5 相手チームと記念撮影。互いに健闘を称えます。 6 右から荒尾ブランチからバレーに出場した村上直子さん、荒木成也さん、東洋子さん、津川さやかさん。4位のリボンと思い出のTシャツを胸に。 7 水泳100m平泳ぎで優勝した宮田紀さん。金メダルに喜びの笑顔。 1～5は田島さん提供

12月3日～9日は障害者週間
障害のある人とならない人がお互いに尊重し支え合う「共生社会」の実現を目指して

共生社会への扉のカギは スポーツにあり

「障害者スポーツ」とは、身体、知的発達、精神などの障がいがある人が行うスポーツの総称です。第二次世界大戦後、障がい者のリハビリの一環として取り入れられてきた障害者スポーツは、現在ではスポーツが従来持っている娯楽として、あるいは競技として盛んに行われるようになってきました。その結果、障害者スポーツは、障がい者の自立や社会参加の支援、そしてノーマライゼーション*社会の構築に向けた役割を期待されるものとなっています。

障害者スポーツと競技大会
障害者スポーツは、障がい者のために独自に考案されたスポーツや、「障がいがあるためにできないことがある」/「障がいがあるためにある」/「障がいがあるためにある」/「障がいがあるためにある」/「障がいがあるためにある」などの理由で、既存のスポーツを修正しているものなどがあります。これらの障害者スポーツの世界的な大会として、パラリンピック(身体障がい者)を思い出す人が多いと思いますが、他にも「デフリンピック」(聴覚障がい者)や、「スペシャルオリンピックス」(知的障がい者)、「アジアユースパラ競技大会」(アジアの14歳〜19歳までの障がい者)があり、多くの日本人選手が活躍しています。

地域のアスリートがバレーで4位、水泳で1位という成績を収めました。SOでは、競技者を「アスリート」と呼び、他の障害者スポーツとは少し違った観点で実施されています。「SOは、『オリンピックス』と、複数形であることに意味があります」と語ってくれたのは、SO日本・熊本・荒尾ブランチで指導をしている田島光枝さん。「SOは、知的障がい者がスポーツに取り組む一連のプログラムを指している世界で、いつでも、どこでも取り組んでいるから複数形なんです。1種目8週間を1セットとしたプログラムに参加することで、SO競技会の出場権を得ることが出来ます。そして試合はデビジュアルというシステムで行われ、予選によって年齢、性別、技能ごとに組分けをして競技をします。競技の結果で順位は付きますが、上位のアスリートだけが表彰されるのではなく、全員が表彰台に立つことが出来ます」と田島さんは語ります。



参考：認定NPO法人スペシャルオリンピックス日本公式ウェブサイト/厚生労働省公式ウェブサイト/NPO法人スペシャルオリンピックス日本・熊本公式ウェブサイト ほか

* 健常者と障がい者などが互いに区別されることなく、一緒に助け合いながら社会生活を共にするのが本来の望ましい姿であるとする考え方や福祉施策のこと。